

コロナ禍で見えてきたこと、考えたこと

新型コロナウイルス感染症が蔓延し、私たちは経験したことのない生活を送っています。この間明らかになったのは、医療や介護・福祉にも資本の原理が入り、危機的状況下で崩壊が起こりうること。非正規雇用の人達から解雇され、貧富の格差が拡大していること等。危機のもとで、人権や健康で文化的な生活の保障など憲法の理念が生かされたのでしょうか。コロナ禍で、何を思い、どう過ごしているか寄稿してもらいました。

コロナ禍と私

私の絵画制作活動は毎年決まった展覧会に出す作品の制作とその時々気に入ったモチーフで小品を描いています。

今年の2月下旬、額装してよいよ搬出する段になって展覧会中止の一報が入り、その後は4月の東京展、5月の大阪展、神戸展（これはすでに送り済み）も中止になりました。8月の関西平和展の作品はこれからゆっくり描こうと思った矢先、追いかけて中止。足元の梯子を外された思いで次の一歩が出なくなり呆然とする毎日でした。



仲間とスケッチに行ったり、教室の方々と笑いあって絵を描いたりということが無くなり先が見えないことに、不安としんどさが覆いかぶさってくる思いでした。何とか抜け出したいと庭の草むしりをしたり、咲いた花を描いてみたり、積読ままの本を手にとったりと。家の整理、片づけを始めたらもういけません。余計散らかるばかり、挙句の果ては自己嫌悪です。そこで思い直せました。元気に暮らせている今を有難いとの思いに至りました……。

（浜風町 松井美保子）

新型コロナについて思うこと

新型コロナの感染拡大が始まって6か月になります。私は家で自粛しても年金生活で収入の減少はありません。しかし仕事が無くなって収入が大幅ダウンした人や、お客さんが来なくて商売が出来なくなる人などコロナの影響が深刻です。こんな時こそ自粛と補償をセットで政治が国民の暮らしを支えることを強く望む次第です。

今回いろいろな報道で感染の歴史について知ることが出来ました。これまでにいくつもの感染症が世界に広がって多くの命が失われました。その原因について、1つは大規模な伐採などにより生じた新たな病原体と接触したこと。2つは自然との調和を欠いた農業や畜産の拡大により自然の生態系に侵入したこと。3つは病原体を拡散させる野生の小型肉食哺乳類の取り引きをしたこと、が述べられていました。人間と自然の共生とはどうあるべきか考えさせられました。（朝日ヶ丘町 福田千種）

学童保育と私

私は今、障害児の学童保育の指導員をしています。コロナ禍で学校が休校になる中、学童は朝から晩までフル活動していました。7月中旬まで特別支援学校は、3日に1日の登校でした。今は夏休みに入っていますが、子どもたちもよほどのことが無い限り、毎日来所しています。この3か月間はきつかったけれど、子どもたちと密接に付き合えた日々でもありました。

今日は何をしようとか、どこに行こうとか頭を悩ましていました。障害を持っている子どもはピュアです。こちらが不用意な発言をしたら、「うん!？」といった顔をします。それだけに、付き合う方も真剣です。それに障害も子どもにより差があり、比較的軽い子どもから重い子どももいますので、適度に差をつけねばならないのです。しかし、私はこの仕事が好きです。子どもたちと関わることの時間を大切にしていきたいと思っています。（東灘区 久家登志子）



こんな時こそ“プロ”として

「コロナウイルスが近くに迫っている」という実感を強く感じる日々です。私が勤めている居宅介護支援事業所でも感染予防に追われています。感染予防が精神的に負荷を感じるということを改めて感じました。パーティー越しに職員と会話をする、会話をする際に一步下がり距離を置くこと。物理的な距離を置くことで人との心のつながりも遠ざかってしまうような錯覚に陥ります。見通しのつかないコロナ終息に職員の疲れが見え始めました。しかし、このような状況の中でも勇気づけられることがあります。感染症が流行している中、高齢者の自宅でサービスを行うヘルパーはいつもと変わらぬサービスを提供していました。自身が感染するかもしれない中でヘルパーは任務を全うすべく、訪問に出かけていきました。利用者を感じる気持ち、万全の感染対策など、プロとしての気概を感じました。コロナ禍の中、自身の危険を顧みず、サービスを提供するヘルパーのように、プロとして家庭でも職場でも過ごしていきたいと思えます。(緑町 吉田晃)



「コロナ後」と笑い飛ばせるか

代わりに「歴史教科書カフェ」の案内を

「ますます面白い、目から“ウロコ”の歴史教科書カフェ」に取り組んでいる西宮の友人たちから、毎月1回の例会案内を頂き、私も毎回のように馳せ参じてきました。

で、5月の緊急事態宣言の解除後は、「コロナ後を笑い飛ばそう」と、大量の川柳が送られてきて、では、これを紹介しよう、と張り切っていたのですが、コロナ禍の振り返りで、とても笑い飛ばせる状況ではありません。なので、9月以降の「教科書カフェ」の日程を紹介することにします。

教科書は、現役の教員、研究者などを中心に自主編集した「学び舎版」と戦争賛美の「育鵬社版」とを読み比べ、テーマに沿って招いた体験者の話を聞く、というスタイルで、論議を深めています。会場は阪急西宮北口駅南側の「プレラ西宮」411号学習室。9月5日が「にんげんを返せ～原爆投下」、10月3日が「本土決戦か降伏か」と続き、12月6日は「もう戦争はしない～日本国憲法」で、民主化への足跡を辿ります。問い合わせ・申し込みは電話0798・71・3920へ。

(東灘区 田所明治)

コロナ禍の中の散歩で 感じた学校・園の役割

退職を機に、今春来、肥満改善のために、ほぼ毎日、芦屋川から芦屋浜（埋立地）に散歩。1時間半から2時間くらい。芦屋川に代表される恵まれた環境・景観は六甲山と共に市民の宝。みんなで守っていききたいですね。次に記すのは、散歩しながら、長期休校・休園中、とくに「緊急事態宣言」中に感じた二つの「悲しみ」です。一つは、芦屋川とその河口浜辺のゴミ（ポリ・レジ袋、空き缶、ペットボトル、菓子袋など）が増えたこと（1970年代の六甲山がゴミの山だったことも想起し）。なぜ捨てるの？もう一つは、やや複雑な気持ち。たくさん



の幼児や小学生が魚を追いかけたりカニを探したり、潮干狩りをしたり、水遊び。また、芦屋公園でも遊んでいました。ほおが緩みます。しかし、近くに住みながら川や公園で遊べない子どもたちが少な

からずいたはず。家庭の経済的文化的格差、家庭の円満格差に心が痛み、子どもの豊かな成長のための小学校や幼稚園等の大切さを思いました。

（東芦屋町 久保富三夫）

政府には不信感しかない

「PCR検査拡充、医療体制と保健所の強化、自粛と補償はセットで」と野党が要求し続け半年以上経つも、対策は遅々として進んでいません。アベノマスク、GOTOトラベル、自粛と我慢の国民押しつけ、国会閉鎖等など、愚策・無責任の安倍政権。先月から全国で再び感染が拡大していても、「高齢者と重症者が少ない、医療に余裕」等、この期に及んでも本気で取り組む姿勢は見えません。医師会や大学関係者の問題提起にも聴く耳を持ちません。もしかしたら、感染大噴火前の不気味なくすぶり状態かも・・・。噴火して医療がパンクすれば、何かと理屈を並べ立て、命のトリアージをするのではないのでしょうか。国民の命と暮らしを守ろうとしない政府には不信感しかありません。それにしても「ウィズコロナ」はおかしい、「一病息災」ではないのですから。「コロナ終息を目指す」と宣言して欲しい。この危機的状況、何を置いても国民を守る強い信念を持つ政府に変えたいとつくづく思う今日この頃です。



（東芦屋町 柳富子）

自粛ポリスはファシズムの始まりか

1923年9月関東大震災直後、武装した民間人達が「自警団」を組織し、無実の朝鮮人に次々襲いかかったという。

コロナ禍に、政府の自粛要請に従わない者を糾弾する「自粛警察」と呼ばれる人達が現れた。SNSで暴言吐いたり、店に貼り紙をする程度で、自警団のような集団暴力とは違いますが・・・なんだか近いものを感じませんか？井戸水に毒を入れる不逞朝鮮人には制裁を！ウィルス感染を広げるような奴はけしからん！権力者の号令のもと「悪辣な敵」を攻撃。人々は正義の側に立ちながら、好き放題暴れまわっても罰せられない、という図式は両者に共通する。

甲南大学教授の田野大輔氏は「権威へ服従する自警団的な行動はファシズムの根本的な特徴を体現している」と指摘する。〇〇禍に起こりやすい集団の力の怖さを学び直すチャンスは、今なのかもしれん。

（東灘区 山田章）

